

新

歌人群像

岡部文夫

● 北国の風土と人に執心

● 大滝貞一 ●



発禁歌集からの出発

岡部文夫は一九〇八（明治四十二）年四月二十五日、石川県羽咋郡高浜町（現志賀町）に生まれた。父亮吉・母きのの三男である。高浜尋常高等小学校の二級上に坪野哲久がいて、生涯にわたって兄事敬重する。八歳のとき母が死去し、継母光枝に育てられる。羽咋中学校に入学し、教師に「アララギ」会員の広田好がいて短歌に興味をもち、図書館でアララギ叢書を耽読した。

一九二八（昭和三）年、中学卒業後上京、二松学舎専門学校（現大学）に入学し、『万葉集』を森本治吉に、明治文学を塩田良平に学ぶ。坪野の勧めで一時「ポトナム」会員となるが、同誌を去り「短歌戦線」創刊に加わる。プロレタリア短歌への没入である。坪野と共に「短歌前衛」発刊、「新興歌人」の編集に従う。一九三〇（同五）年、二松学舎を中退して帰郷、岡部太一郎三女ミツと結婚し、本家を継ぐ。同年二月、歌集『どん底の叫び』、九月、歌集『鑿岩夫』（共に紅玉堂）を発刊するが、すぐ発禁処分を受ける。この二歌集は世に残らないので収録歌は不明だが、同期に刊行された『プロレタリア短歌集』（一九二

九年五月メーデー記念出版)に、彼の歌が残っている。

たくましい仲間の腕が機械を廻すとき
見ろ浚漉船はがつくり上る

飯も食べないで寝てゐる俺のすき腹に
奉祝の花火がひびきわたつた

こののち発禁を契機として、口語自由律歌から訣別し、一九三一(同六)年五月、橋本徳壽に入門、「青垣」会員となる。同時に高崎地方専売局に就職した。高崎、越後柿崎・安塚、信州飯山、尾張犬山と転居するが、その期間に山本賢次との合著歌集『いしかは』(一九三七)同十二(年十月・青垣会)を刊行したりしている。

いくたびの時雨は降りし山笹もしろく
なりつつおとろへてあり

まさびしき山谷川の上にして鳴りわた
るかも雪おろしの雷

冴えかへる斑雪の上に尾は垂りておの
れひかりのごとき山鳥

山の村の冬の寂しさとむらひの白落雁
が大きかりけり

合同歌集『日月』(一九四四)同十九)年十月・青垣会)の中に収録されている、岡部の

「流水」二八八首中の「越後安塚」の項の作品で、一九三八(同十三)年、作者三十歳時に当たる。この歌集には戸塚道治・岡部・岩倉正信・玉田登久松・吉川金一郎・山本賢次・倉片みなみの七人が参加している。第二次世界大戦突入に傾く世相から、暗鬱な戦時中にかけての時代、懸命に作歌に懸けていた作家群像の真摯さが、直截に伝わってくる。

岡部の詠んでいる安塚は、新潟県の最南部で長野県境にも近い山間地。厳冬の季節に移ろうとする自然を凝視した静かな写生によって、深閑たる靈気さえも描出されている。プロレタリア短歌から完全に脱した感覚美への研ぎようである。なかでも斑雪の上の雄山鳥の美しい垂り尾、みずから光体となり鎖もる山鳥は雉子よりやや大きく、白斑入りの赤銅色の光沢のある羽毛が長く美しい。ドロドロドロと大きな羽音を立てて友鳥を呼ぶ。母衣を打つかの生熊が眼前に現れるようだ。岡部の専売局社宅が、私(筆者)の出た高等学校の近くにあったこともあり、後年親しく交流する機縁につながった連作で、私にも忘れ難い。

土着の人の悲しみを

岡部が青垣会に所属したままで、橋本米次



無産者歌人連盟の頃の岡部文夫(中央)。右は坪野哲久(1928年)

郎・田中譲と語らい、みずから「海潮」を創刊したのは、一九四八(昭和二十三)年十一月である。「日月」以後もひきつづき、歌集『寒雉集』(一九四六)同二十一(年九月・青垣会)、歌集『朱鷺』(一九四七)同二十二(年九月・青垣会)、扇畑忠雄・二宮冬鳥・服部忠志との合著歌集『候鳥』(一九五二)同二十七(年十月・長谷川書房)と歌集を刊行する。しかしここでは、「海潮」創刊以降、最初の単行歌集となった『石上』(一九五二)同二十七(年十二月・海潮短歌会)の中から、作品を抽出してみることにする。

山菜黄の黄の群花の散り布きて湧井の石を隠さむとする

岡部文夫(中央)を囲んでの一夕。左は加藤将之、右は宮柁二(1971年)



日のひかり海より低く差しながらおぼ
おぼとして枇杷の白花

雪しまく暗澹の天きびしきに叫らびて
榛の裸木らの列

梟に食はれし蟹が糞の中に形のままだ
ありたりみれば

華麗な照耀には遠く、いくぶん陰鬱な雰囲
氣に被われたような詠みぶりが特色になつて
いる。暗褐色をおびた色調の中に、しかし対
象の翳の隈がかえってきわだっている。写真

の徹底を心にし、決して浮躁に陥ることのな
い作歌態度によるのであろう。

このあたりのことを、作者自身が歌集の末
尾の「小記」に「つとめて騒しいものを篩ひ
落とすやうに努力した為でもあろう」と書き、
更に「田舎にばかりゐたから、いつでも前方
を手さぐりにあるかなければならなかつた。
或る時は暗澹として皆目行手のわからないこ
ともあつた」と述懐する。

風の中にさまざまにして音きこゆ蹄鉄
を打つ音は鋭く

蟻姑ひとつ啼ける砂より幾ほどもなき
暗黒に吾は居りつも

あらはなる老の踵に垢切は鱚の鰓の如
く切れたり

一つ蝶二つに切りて雪の日の早き夕餉
を吾が妻と終ふ

鯨か鯖か聞きてゆふべを待つたのし用
なき老の花莫塵の上

歌集「青柚集」(一九七五(同五十)年五
月・短歌新聞社)の中の歌。前集『石上』と
同じく、頑固なまでに地味な暗色に包まれて
いる。長い地方転勤を続け、若狭小浜、越前
福井を経て、ようやく越前春江に落ち着く。

一九六七(同四十二)年三月、日本専売公社
を定年退職し、翌年には自誌「海潮」に専念
するために、青垣会を退会している。

周辺の蹄鉄を打つ職人も、昼夜休むことな
く働き続ける漁師や傭たちの垢切れの手や行
商の老婆たちへの、生活者としての同化や同
情が、たくましく詠まれている。長く生活を
共有してきた者にもみ確かに見え、決して他
者には見ることでできない、呼吸のような
ものさえ感じとられている。

先に書いたような、作者の勤務地と私の故
郷の偶然の一致や、作者の兄事した坪野夫人
の山田あきが私と同郷であること、その長兄
村松苦行林との交流などの縁で、私がこの歌
集の解説を書いている。冗漫な解説文を辿る
よりも、作者自身の「後記」の一節を掲げる
ほうが適切だろう。

「――冬を対象に虐げられる貧しい風土と、
そこに牡蠣のやうに住みついてゐる人々のか
なしみを私は土着のひとりの生活者として歌
ひあげたいと思つた。風土的な特性が私のこ
れらの作品にどれほど現はれてゐるかはおわ
らないが、私は幾らでもないであらうこれか
らの残年を矢張り北国の風土や人間を歌ひあ
げることにかけてゆきたいと念じてゐる」

作者の人情が、余すところなく表白されて



無言の逕空賞授賞式

いる。この後に歌集『石の上の霜』（一九七七）（同五十二）年四月・短歌新聞社）、『晩冬』（一九八〇）（同五十五）年四月・短歌新聞社）があるが、ここでは省略する。

能登の春なほ寒くして山椒魚の産卵も
ことし遅るとごよみ

日照のなき一冬を籠りつつ雪ぐには多
く痾瘵を病むとふ
蹠に胼胝の硬きを残すのみ長き忍従
の一生終へたり
冬ゆゑに継母が紡む麻のつぎつぎに麻
桶に溜る美しかりき

岡部の最終歌集『雪天』（一九八六）昭和
六十二）年十月・短歌新聞社）の「あとがき」

は、作者自身の筆ではない。その年の五月末
に突然の失語症になり入院。病床で回らぬ舌
で、しきりに歌稿ノートを気にし、歌集に纏
めることを懇願した。ミツ夫人が出版社に渡
したのち、次のように代筆した。

「歌が生命の人が、自分で（推敲）出来ない
のを見ていると哀れでなりません。能登に生
まれ、北陸の土着の者にしか作れない作品を
作りたいというのが、常々、夫の念願でござ
いました。似たような歌が多く雑然としてお
りますが、この歌集もその心に基づいている
ものと思われます。（中略）一日も早く、こ
の歌集を、本人が声を出して読める日の来る
ことを願わずにはいられません」

歌集の作品は、相も変わらず一貫して土着
人の生活描写に徹している。たまたま一首目

に山椒魚が詠まれているが、彼の歌に詠まれ
る魚は、鯖・小河豚・鮎・針魚・梭子魚・
烏賊・皮剥・鰯など、全く庶民的な魚である。
ここにも作者の目の位置が感じられる。また、
雪ぐにでの労働に虐げられた末の痾瘵病や、
忍従そのものの痕跡のような蹠の胼胝などへ
の心寄せも痛々しい。さらに二十八年前に亡
くなっている継母への懐かしみと麻糸の美し
さへの執着などに、この作者ならではのやさ
しさを見る思いがする。

さて、この歌集に対して第二十一回逕空賞
の授与が決定した。どちらかといえば忘れら
れがちであった隠れた実力地方歌人に対して
の光明である。山本健吉の強い推挙があった
という。一九八七（同六十二）年六月三十日、
東京会館での授賞式には、夫人の介添えを得
て岡部も出席した。壇上で終始無言のままの
作者は深々と頭を下げた。夫人は、「立ち直
れるかどうかはわかりませんが、今の状態で
いえば、岡部の歌集の最後を飾ってください、
ありがとうございます」と代弁した。いま
に忘れられない感動の挨拶であった。

一九九〇（平成二年）八月九日、岡部は急
性肺炎を併発して、八十二歳の生涯を閉じた。
昭和短歌史に残る不屈の歌人であった。

（おおたき・ていいち「雲珠」主宰）